

B-17

高島町における7年間における母子歯科保健管理

○山口 香奈美、中野 俊美
宇田川 義朗、有田 信一

ありた小児矯正歯科

高島町において、現在、0歳から中学生までを対象に歯科保健管理を実施しているが、特に、母子歯科保健管理は平成1年より平成8年まで（7年間）継続して、1歳から3歳までの幼児を対象に（対象人数20名から10名）健診とフッ素塗布を中心とする予防管理を実施してきた。

その結果、3歳児においてはう蝕有病者率は100%から約83%に、う蝕有病菌率は約57%から10%に、一人平均う蝕数（def指数）は約10本が約2本へとう蝕の減少が認められた。治療が必要なC2以上のう蝕も38本から0本へ減少した。

1歳児、2歳児においてはう蝕有病者率の減少は3歳児に比較して、少ないものの、う蝕有病菌率およびdef指数は半減し、C2以上のう蝕はなくなった。しかし、年度ごとや健診時において、う蝕のデーターにかなりの変動が見られ、低年齢児におけるう蝕予防管理の困難さも伺えた。

今回は地域（住民数約1000人）における7年間の歯科管理のデーターを元に低年齢児における歯科管理の問題と展望を検討したので報告する。

B-18

上顎第一大臼歯の歯冠形態異常と部分的歯牙の先天欠如を伴う姉妹の症例

○福本 敏、ホーン裕子、常岡亜矢、
細矢由美子、後藤譲治

長大・歯・小児歯

全身的・局所的要因による歯冠の形態異常及び歯の先天欠如は、日常の歯科臨床においてしばしば認められ、咬合誘導の点からも問題となることが多い。歯の先天欠如の発生頻度は本邦において乳歯で0.4~1.0%、永久歯で3.0~6.0%である。原因として遺伝、内分泌疾患、外胚葉組織の発育不全、妊娠中の母体の栄養欠如などさまざまな原因が考えられている。最近、ある種の転写因子の点変異により歯の先天欠如が生じるとの報告もなされている。今回我々は、家族性に認められた乳歯及び永久歯の先天欠如と、上顎第一大臼歯の形態異常を伴う症例を経験したので報告する。

（症例）：昭和57年10月5日生 女児（姉）
昭和59年7月17日生 女児（妹）

（主訴）：歯数異常

（家族歴）：母が下顎中切歯の先天欠如
であること以外特記事項なし

（全身的既往歴）：特記事項なし

（口腔内所見）：乳歯列において、姉はB1Bの先天欠如及びE1Eの萌出遅延を認めた。また、妹はB1B先天欠如を認めた。現存歯については以下に示す通りである。

姉	654C31	13C456	(13Y 5M)
	7654C3	3C4567	
妹	6E4321	1234E6	(11Y 8M)
	6 E431	1 34 E6	

妹の上顎第一大臼歯は左右とも近遠心逆形態である。また、姉の上顎第一大臼歯は遠心舌側咬頭が認められず、そのため遠心小窩、遠心舌側溝の存在が不明瞭であり、系統発生的退化傾向が認められる。上顎第一大臼歯の近遠心逆形態を有する症例は未だ報告されておらず、本症例は部分的歯牙の先天欠如を伴うことから、歯の発生及び形態形成を考える上で重要な症例と考えられる。